

新篇・よく利用され なお美しい矢作川の創造をめざして

— No. 16 座談会・矢作川環境派の記録専門誌『季刊矢作川』を2015年春創刊へ—

Towards the creation of beautiful Yahagi River even hardly utilized No. 16

新見幾男

Ikuo NIMI

河川利用の「対立関係」が「共同利用」へ 矢作川環境の基本方向を理論化

新見幾男（司会） 1994（平成15）年に豊田市矢作川研究所が第3セクターでスタートし、その2年後の1996年に市民団体の矢作川天然アユ調査会も発足して、ダムに分断された矢作川においても「天然アユ復活」の気運が高まってきました。しかし、安定的に天然アユが矢作川に復活するには、まだまだ課題が多い。

今後の課題について、4人で意見を交わしたいと思います。古川さんは矢作川研究所創立の頃から矢作川の環境問題にかかわって来られた。今は矢作川研究所の研究顧問ですね。

古川彰（環境社会学） ダム河川である矢作川において、今後も天然アユの安定的復活につながっていくようなことが2点、矢作川研究所草創期の頃から語られてきたと思います。矢作川には既設ダムがいっぱいありますが、矢作川の環境派の人々は簡単には「ダム絶対反対」とは言わなかった。ダムの功罪を農業用水や発電ダムの管理者の皆さんと一緒に見つめてきたと思います。そこに矢作川環境保全の「原点」があったのでは。

新見（幾） 古川さんが中京大学社会学部（豊田市）の教授をしておられた頃に環境社会学研究室で議論があって、そこから『良く利用され、なお美しい矢作川の創造をめざして』という目標が定められたと思う。

古川 河川利用の「対立関係」が「共同利用」にむけて理論化されていったと思います。最初に矢作川漁協の姿勢として理論化され実践してこられ、それが矢作川研究所の姿勢にもなっていった……。

新見（幾） これは中京大学の研究室で誕生した“矢作川原産”の理論ですね。

古川 それからもう1点。矢作川漁協は「河川環境問題は補償金では解決しない」と宣言していますね。いつ

頃のことですか。

新見（幾） 矢作川河口堰建設問題が1998（平成10）年に建設休止の形で決着しましたが、当時の建設省は「補償金で解決」を漁協側に正式提案していた。当時の漁協側もそれに同調していたが、漁協内部に大異変があった。漁協の総務委員長だった澤田寿さん（のちの組合長）が漁協理事の任期に定年制を電撃的に導入し、補償金派の古参理事が全員退任したのです。それが矢作川河口堰建設中止の一つの理由になったと思われませんが、直接的には愛知県が矢作川河口堰の工業用水水利権を放棄したことが大きな理由だった。なお矢作川漁協理事会は2009年に、「河川環境問題は補償金では解決しない」と別件で再決議しています。

古川 矢作川が既設ダムとどう付き合うかという姿勢や、河川環境を補償金で切り売りしないという姿勢さえ堅持できるのなら、今後の天然アユの安定復活の問題も解決可能では。

遠志保（民俗学） 矢作川漁協百年誌『環境漁協宣言』にも、矢作川研究所の出版物にも、矢作川の天然アユがいつ復活したのかについて宣言がないですね。毎年の調査記録を読んで、それぞれ判断して下さいということですか。

新見克也（矢作川天然アユ調査会長） もう「復活宣言」したものと思い込んできましたが、あらためてはしていませんね。

遠 記録を残す立場から言うと、いつ矢作川の天然アユは復活したという宣言か、何年頃にはこういう状態であったとかいうような記録を残した方がいいと思います。

新見（幾） 豊田市矢作川研究所のスタートから9年後、『環境漁協宣言』が出版された2003年には、矢作川の豊田市街地（40km地点）～矢作第2ダム（74km地点）



写真 2013年9月16日の台風16号の際の矢作ダムは毎秒1000トンの洪水を常用洪水ゲートから放流した。矢作川的环境派はダム洪水放流の「環境プラス効果」を調査し、記録に残さなければならない。

の間が天然アユで満杯になった記憶です。最上流の小渡ヤナでは秋に大きなアユが落ちた。大量遡上だったので、天然遡上の中で特に大きな一番仔（いちばんご）が上流域まで押し上げられたのでしょうか。ヤナから電話があったので「3本焼いておいて」と注文して出かけたのですが、大きすぎて1本しか食べられなかった憶えがある。ヤナに「大豊漁」の営業記録が残っているのでは。

達 小渡ヤナの河口からの距離は？

新見（幾） ほぼ70km地点です。2003年春は大量遡上だったので、「今年は上流域まで天然アユがたくさん行くからね」と予告したのですが、誰も信じなかった。漁協の新見さんのホラだと言われた。

古川 塩焼きアユが1本しか食べられなかった、というその天然アユの大きさは。

新見（幾） 28～30cmくらいかな。

古川 ホラじゃないですよ。

新見（幾） 塩焼き3本を予約注文した時、ヤナのおばさんに「1本にしときなさいよ！」と言われた。結局2本は家に持ち帰ったね。

矢作川の天然アユ復活も洪水の話もボランティアで毎年記録に残そう

達 それは2003（平成15）年のことだから、10年前ですね。その間の記録は？

新見（克） 毎春の天然アユの遡上量（明治用水・越戸ダムの魚道）や、秋に生まれた仔魚の海への流量は、矢作川研究所と天然アユ調査会で調査・公表しています。しかし、今の話のように70km地点まで天然アユがのぼり、小渡ヤナに大アユがたくさん落ちたなどという記録は残らない。空前絶後のような感動的な話は消えていきます。

古川 それを毎年記録したいですね。ボランティアでやりましょうか。それなら長続きする。

達 10年も前の感動的な話を、なぜ昨日のここのように新見さんは話することができるのですか。

新見（幾） 2003年は自分が矢作川漁協の第9代組合長に就任した特別な年だったからね。前組合長の澤田寿さんが『環境漁協宣言』を出して退任された年でもあります。ボランティアで毎年記録を残すのがベストでは。

達 今日のように座談会をやり、私がテープ起こしをやり、パソコンに打てばいいですか。

新見（克） それを印刷して、会員制で有料頒布する。分析記事を書くのも会員制でやる。矢作川研究所と天然アユ調査会の調査資料も載せさせてもらいましょう。

古川 昔、新見さんたちが第100号まで出した同人誌『月刊矢作川』の復刊に通じますね。

新見（幾） 季刊でも年刊でもいい。ゆっくりとやりましょう。

古川 新見さんは天然アユの安定的復活にむけ、今後、何を提起されますか。

新見（幾） 第1は、いま古川さんと達さんから話が出た『季刊矢作川』をつくることですね。これは早くやりましょう。今春にも創刊号を出したいです。

第2は、産卵期のアユの捕獲の自粛です。四万十川などの有名アユ河川が駄目になったのは、産卵期のアユの網漁を放認しているのが大きな原因です。特にダム河川である矢作川では網漁やガリ漁を厳重に管理すべきです。矢作川は「友釣り専用の都市河川」の位置づけにすべきです。市民の釣りが喜んでくれるし、漁協も生き残れる。早くから漁協組合員だけ産卵前のアユの網漁を認めることは漁協の自殺行為ですね。

第3に、発電ダムも農業用ダムも、秋には産卵期のアユが産卵場へ向かって降下できるようにダムの構造を改善したり、運用を改善したりしなければならない。いまの状況は水産資源保護法違反ですよ。中電の越戸ダムでは漁協と協働で、産卵期のアユを捕獲し、トラック輸送で下流の産卵場へ運んでいる。そういうミティゲーション（回避、最小化、再生、代替などによる開発の影響緩和措置）もすすめなければ。

古川 いまのダムの構造改革、運用改善が一番の難題ですね。

河川洪水には“プラス効果”もある 市民にみせる「洪水まつり」を提案

新見（克） そうですけど、矢作川の現場で天然アユの復活に取り組んでいる者としては、ダムの構造改善や運用改善に至る経過措置をもう少し幅広く研究したい。越戸ダムのミティゲーションを私たちは非常に高く評価しています。いま第3まで問題提起がありましたが、そこから一歩前進するため、もう一つ提起しておきたい。

第4に、2013年9月16日の18号台風の際、矢作ダムが毎秒1000トンの洪水放流をして豊田市街地の河川

敷の市営公園に被害が出た。もう少し上流の矢作川のヤナには大きな被害が出た。これはダム放流の「マイナス影響」ですが、あの矢作ダムの中規模放流には河川環境への「プラス効果」もあったのではないかと。私たちが聞き取り調査をするので、『季刊矢作川』にダム放流の「プラス効果」をぜひ記録してほしい。

古川 うん、大事なことです。

達 すごく興味がある。河川土木系の研究者の関心が集まります。新見さんの洪水の河川環境への「プラス効果」論は……。

新見（幾） あの18号台風洪水のことは、初めから終わりまでぜんぶ観察していました。NPO 矢作川森林塾の河畔林整備の現場が40km地点の豊田大橋付近にあるので、矢作川の河川環境変化は毎週土曜日の早朝の作業日ごとに見てきた。

達 結論は？

新見（幾） 川底がやわらかくなり、今年の天然アユの産卵は良くなるぞと思った。矢作川研究所と天然アユ調査会の調査もそういう結論だったようです。釣果も中流地区（広瀬）では18号台風以降に良くなったそうです。

達 聞き取り調査に同行します。記録しましょう。

新見（幾） 中規模洪水というのは、魚類の生息環境という意味の河川環境への「プラス効果」がすぐに分かるからいいですね。

新見（克） そうですよ。われわれ天然アユ派が「環境プラス効果」を記録に残さないと、洪水の「マイナス影響」ばかりが強調されるようになる。

古川 矢作川グループのものすごく大事な理論展開だと思います。

新見（克） 第5に、まったく新しい提案ですが、天然アユの産卵期に合わせて毎秋1回は、ダム群のいっせいで小規模・中規模の短時間・人工洪水を起こしてはどうか。天然アユの産卵期はちょうど農業用水の需要が終わった時期です。半日くらいの短時間の「洪水まつり」を行って、市民が矢作川の本来の姿を観察する。大勢の市民が矢作川を見物にきたら面白いですよ。この日に合わせて川の防災訓練もしたらいい。

古川 すごくいい提案です。1年に1回くらいは市民が自然の川を見る日が無ければ、ダムがたくさんあっても、ダムがない川のような流れを1年に半日くらいは人工的につくる。河川の野生の生きものの中には洪水がなければ子孫を残せない生物がたくさんいますよ。人間が勝手気ままに川を独占しすぎたと思います。

新見（幾） よくわかりますよ。

矢作川のアユ漁場を2分割しては 天然アユ完全保護区と放流アユ研究区

新見（克）最後に第6の提案ですが、さきほど矢作川の天然アユ保全方策として全川を「友釣り専用の都市河川」に位置づけてはどうかという提案がありましたが、全川友釣り専用区というのは、今の段階では実現性に乏しい。天然アユの完全保護区は当面、阿摺ダム（56km地点）から下流の広瀬～平戸橋～豊田～豊南地区だけでいいのではないかと。それで矢作川の天然アユ資源は賄えるのではないかと思う。

一方で、阿摺ダムから上流の川口～笹戸～小渡～浅野地区は人工孵化アユの放流区域として放流技術の研究をしっかりとやる。天然アユの保護区ではないので網漁やガリ漁も一定の規制のもとに可能にすればいい。

古川 要約すると、矢作川漁協のアユ漁場の延長約45km区間を、河口から56km地点の阿摺ダムを境界にして下流地区・上流地区に2分割し、下流地区は天然アユ完全保全地区（友釣り専用区）にする。上流地区にも天然アユは遡上していくが人工孵化アユ放流中心の漁場運営にし、網漁やガリ漁も可能にする。そういうことですね。新見さんはどう評価しますか。

新見（幾）議論しやすくなりますね。完全天然アユ保全区の「下流地区」は漁期が後ろにずれるかも知れないが、秋の遅い時期まで釣れる。ここに全国の友釣り師が集まってくるはずですよ。

放流アユ区間の「上流地区」は放流アユの研究を集中的にやることになるだろうから、春～夏の早期のアユ釣りが盛んになる。こちらも早期のアユ釣りで全国的に有名になり得る。

今まで「全川で天然アユの保全を目指す」と言いながら、結局は天然アユ保全も放流アユ研究も中途半端だったと思う。下流の完全天然アユ保護区と、上流の人工孵化アユ研究区へ2分割することによって、矢作川に特色のある2地区が誕生する。これで天然アユの安定的復活にメドがつく。上流の放流アユ研究も進む。下流の天然アユ復活が本格化すると、それが上流へも自然遡上していく。すごく良い結果が出る予感がします。

釣り人が喜び、矢作川愛好家が増える。全国で河川漁協がつぶれる傾向だが、矢作川漁協の経営は改善されるのでは。

古川 次の『季刊矢作川』の座談会は3月ですね。5月には創刊しましょう。

新見（幾）古川さんが発行責任者、私は矢作川を取

材して歩く。

新見（克） 会員制の運営がいいと思うから、僕は組織担当をやりましょう。

達 私は記録、制作をやります。

古川 全国各地で天然アユ復活の仕事をしている研究者の高橋勇夫さん（高知県）にも仲間になってもらいましょう。

新見（克） 僕の西日本科学技術研究所時代の上司で、アユ釣りの師匠でもありますから、お誘いしたところ御了解いただきました。

古川 それでは5人で仮称「季刊矢作川」を今春には創刊しましょう。

座談会出席者プロフィール

— 発言順 —

新見幾男（にいみ いくお）岐阜大学農学部卒・元豊田市職員労組委員長。第3セクター経営時代の豊田市矢作川研究所事務局長、現豊田市矢作川研究所運営協議会副会長。矢作川漁業協同組合前組合長、現顧問。週刊ローカル紙（株）矢作新報社創業・現取締役会長・記者。著書に『環境漁協宣言』『ヨーロッパ近自然紀行』（共著、風媒社）。豊田市井上町1-73。TEL 090-7618-8155。

古川 彰（ふるかわ あきら）京都大学大学院博士課程修了（農学博士）。関西学院大学教授。専攻は村落社会学、環境社会学。矢作川研究所研究顧問。主な著書・編著に「環境イメージ論」（弘文堂）、「村の生活環境史」（世界思想社）、「アユを育てる川仕事」（築地書館）など。

達 志保（つじ しほ）愛知県立大学大学院博士課程修了（国際文化博士）。愛知県立大学、中京大学、愛知淑徳大学非常勤講師。専攻は民俗学、口承文芸研究。矢作川研究所研究員（2008年4月～2013年3月）時代から枝下用水史編集に取り組み、現在は枝下用水130年史主任編集委員。著書に「徐福論-いまを生きる伝説」ほか。

新見克也（にいみ かつや）愛知大学卒。岐阜大学和田教室でアユ調査。豊田市のローカル紙（株）矢作新報社編集長。矢作川漁協理事。市民活動では、矢作川天然アユ調査会会長、矢作川水族館発起メンバー、矢作川天然鮎感謝祭実行委員会会長、矢作川漁協ホームページ鮎モニター釣り師、豊田市自然愛護協会理事。著書に「アユを育てる川仕事」（共著、築地書館）、「森の健康診断」（共著、築地書館）、「大人も本気で川遊び」（共同通信配信の連載）